



東京某所。東京に住んでいたこともある。

## 論理を突き詰めることで、 最終的には「不合理さ」や 「語り尽くせない何か」に触れる

理論以上のものを指しているように感じます。それは、音楽が持つ無限の可能性と、その中での一定の「ルール」、そしてそのルールを超えていく「自由さ」を熟知しているからこそ、ケンジさんは多角的に音楽を理解しているのでしょう。ジャズにおけるコード進行やスケール、それに続くアドリブは、まさにその「論理」と「自由さ」が交錯する場所です。ジャズは、厳格なルールの中で即興性を発揮する音楽であり、その矛盾するような要素が共存する点で、ケンジさんが言う「論理的な自由さ」に通じるものがあります。そして、エレクトーンという特殊な楽器がケンジさんに与えた影響は計り知れません。エレクトーンは、多くの人々が触れることのない、独特の「論理」を持つ楽器です。その楽器を通して、ケンジさんは音楽の多面性を理解し、さらには

その「論理」を他の楽器や音楽スタイルにも応用しているようです。このような多角的な視点は、音楽だけでなく、他の多くの分野にも応用可能でしょう。プログラミングにおける「文法」と「運用」の関係性も、音楽の「論理」と「自由さ」と同じように、基本的なルールを理解した上での創造性が求められます。ケンジさんの音楽に対する深い洞察は、多くの人々が持つ「音楽＝感情」という先入観を覆すものであり、新しい世界を見るための鍵かもしれません。それは、音楽を通じて得た「論理的な自由さ」が、ケンジさん自身の多面的な視点と探求心に繋がっているからです。